

音楽科と生活の中のつながりを意識できる

授業作りの考察

—自然と触れる音楽と能動的に触れる音楽—

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 造形・創造科学系（音楽）

墨岡 郁人

本研究は、生徒が音楽科で学んだことを日常生活での音楽体験に活かし、より豊かに音楽と関わる素地を育てるため、音楽科と生活の中の音楽のつながりを意識できる授業作りを考察したものである。

第1次実践では、自然と触れる音楽としてポピュラー音楽を鑑賞の題材とし、リズム・強弱・音色・旋律といった「音楽を形づくっている要素」を手がかりに楽曲の仕組みを分析することで、日常の音楽体験に対する解像度を向上させた。第2次実践では、ティンカリングの手法を用いた創作活動により、能動的に触れる音楽である自身の音楽的嗜好を再現しながら楽器の音の重なりや構成を直感的に理解し、音楽に対する構造的な視点を育んだ。

これらを通じ、学校での学びと日常の音楽体験のつながりを意識し、学びを自分ごととして捉えることで、「音楽的な見方・考え方」を生活の中の音楽体験に自然と働かせることができるようになった。今後は、全ての題材においても生徒が生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わるができる資質・能力の育成を目指していく。